

4 分割後期・二次 国 語

国 語

注 意

- 1 問題は **1** から **5** までで、12ページにわたって印刷してあります。
- 2 検査時間は五〇分で、終わりは午前九時五〇分です。
- 3 声を出して読むはいけません。
- 4 答えは全て解答用紙にHB又はBの鉛筆（シャープペンシルも可）を使って明確に記入し、**解答用紙だけを提出しなさい。**
- 5 答えは特別の指示のあるもののほかは、各問のA・イ・ウ・エのうちから、最も適切なものをそれぞれ一つずつ選んで、その記号の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 6 答えを記述する問題については、解答用紙の決められた欄からはみ出さないように書きなさい。
- 7 答えを直すときは、きれいに消してから、消しくずを残さないようにして、新しい答えを書きなさい。
- 8 **受検番号**を解答用紙の決められた欄に書き、その数字の ○ の中を正確に塗りつぶしなさい。
- 9 解答用紙は、汚したり、折り曲げたりしてはいけません。

1

次の各文の——を付けた漢字の読みがなを書け。

- (1) 夜空に輝く月を雲が覆い始める。
- (2) 鍋で水を沸騰させてスープを作る。
- (3) 天体望遠鏡で宵の明星を観測する。
- (4) 演者の華麗な舞に大きな拍手を送る。
- (5) 花壇に植えられたパンジーをスケッチする。

2

次の各文の——を付けたかなの部分に当たる漢字を楷書で書け。

- (1) 最寄りのエキの改札口で友人と待ち合わせる。
- (2) サツマイモを育てるためにサイエンを耕す。
- (3) 長い距離を歩いたので足の筋肉がイタイ。
- (4) ミジカい期間で目標を達成する。
- (5) リズムにノってダンスを踊る。

3

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。(＊印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。)

額縁工房「アルブル」を経営する村崎むらざきから額装がくそうの技術を教わりながら働いている「僕」は、「夢が見られなきゃ、だめだ。」と村崎がたまにつぶやくのが気になっていた。ある日、「僕」は田城えんじょうじ寺画廊てらがらから女の子が描かれた絵の額装を依頼された。

エスキースとは、下絵のことだ。「下描き」ではなくて、本番とは違う紙や板に自由に描いて構想を練るのだ。頭の中にあるものを、このリアルな世界に落とす最初の作業。描いているうち新たに生まれてくる光景。妄想と現実を行ったり来たりしながら作品が創り上げられていく、「はじまりの儀式」かもしれない。

どうしてこの絵のタイトルが『エスキース』なのか、それは僕にはわからない。エスキースがそのまま作品になったのか、それともこの女の子にまつわるドラマにエスキース的な意味が込められているのか。

日本人の友達がいると、*ジャックは言っていた。それがこの子なのだろうか。いずれにしても、モデルにするくらいだから何かしらの関わりがあったに違いない。

僕は方眼紙を広げ、フレームデザインのデッサンから着手した。

まずは額縁の形状だ。絵の静寂さを殺さないように、*デコラティブなものは避けたい。かといって、あまり控え目すぎても作品全体が暗くなってしまうかねない。僕は少し唸り、あらためて女の子を見つめた。

彼女の持つ孤独の気配。今にも泣きだしそうな表情。なにか、なにか、希望を持たせてあげたい……。

ふと、胸元のブローチが目にとまった。青い鳥。翼をはためかせ、自由に空を飛んでいる姿。

これだ。

(1) 僕は方眼紙に鉛筆を走らせる。

額竿の内側から外側に向かって、山のようなカーブをつける。外側の山裾にあたる部分は、なだらかに平らに。そうすれば鳥が羽を広げたような断面になるだろう。組んでしまえばわかりづらいかもしれないけど、密かに仕込まれた想いは必ず外へとにじみ出てくる。

そして平らな縁の四隅に……羽根の彫刻。そうしよう。彼女を勇気づけるような、かわいらしく演出するような。

そうなると、フレームの幅が問題だ。太いとこの絵には重いし、細いと彫刻が施せない。

僕はモールドディングのサンプルを詰め込んだ箱を作業台に運んだ。工場で作られたすでに出来上がっている額竿だから、カットしてそのまま組みやすい。幸いなことに、アルブル工房には種類が豊富に揃っている。

デッサンした形状に近いものを、その中から探していく。これまでも、村崎さんを手伝いながら何度もこうやって額装をしてきた。きつともいいものが見つかるはずだ。

山型の断面になっているモールドディングをいくつか取り出し、絵にあてながら僕は完成図を想像した。でも、なかなか決めることができなかった。

………何か、違う。

今ひとつ、じっくりこない。そんなに難しいデザインではないのに。

思い描いているのと似たような額竿がたくさんあるのに、すぐそばまで近づいていると思うのに、何が違うんだろう。

(2) 僕は目を閉じてため息をつく。少し休憩しようと、立ち上がった。冷蔵庫まで歩いていき、麦茶のポットに手をかける。そのとき、円城寺さんの言葉が頭に浮かんだ。

「こういう人がいいっていうんじゃないかって、この人がいいって思えたら、それが完璧な組み合わせだと思いますよ。人ってみんな、ひとりしかないんだから。」

ああ、と僕は声を漏らした。

僕はずっと「イメージに近いもの」を選んで額装してきた。いつの頃からか、そういう仕事のやり方が身についてしまっていた。

円城寺さんの言葉を、額と絵に置き換えてみる。

——— こういう額がいいっていうんじゃないかって、この額がいいって思えたら。

それが完璧な組み合わせだ。絵ってみんな、ひとつしかないんだから。冷蔵庫の扉を閉め、工房の隅に走った。木材の置いてある場所だ。

僕は探し求める。

「近いもの」じゃない。それしかない、ぴったりくるものを。

翌朝、村崎さんの声で目が覚めた。工房の長椅子で眠りこけている僕を心配して、揺さぶってきたのだ。

「昨夜ここに泊まったのか?」

ねほけまなこで僕は体を起こす。朝方、ちよつと横になろうと思ったら眠ってしまったらしい。

「終電、逃しちゃったんで。そのまま作業しました。」

「体は大事にしるよ。」

村崎さんは眉間に皺しわを寄せながら言った。僕は生返事をして立ち上がる。「村崎さん、僕……相談があるんです。」

ちよつと僕を見やると村崎さんはテーブルに着き、促すようにして椅子を指さした。僕は村崎さんと向かい合い、そこに座る。

「あの絵の額、モールディングじゃなくて木材から作ってもいいですか。」

今まで村崎さんがそうするのを手伝ったことはあったし、練習として自分用に作ることはあった。でも、受注品をひとりで木材から手掛けたことはない。そして、失礼な話だが円城寺画廊が潤沢な予算を出してきたとは思いつらかった。

僕はかなり意を決して申し出たのに、村崎さんは驚きもせずあつさりと言った。

「やつとその言葉が出たか。おまえがそう言うの、待ってたよ。」

「……でも、予算のこととか。」

僕がおおずと言うと、村崎さんは唇の端を片方、上げた。

「俺、ひとつは流木使うから。おまえの額装に多少金がかかって、トントんだ。」

僕は安堵あんどと喜びとで、「タダですもんね！」と笑った。ところが村崎さんは、不本意な表情を浮かべる。

「タダっていうのとは違うぞ。プライスレスだ。」

村崎さんはテーブルの上で手を組んだ。

「今回、円城寺画廊が持ってきた作品の中に、十九世紀の旅芸人の一座を描いた油絵があつてな。家族なのかもな。老人も子どももいて。あれを見たとき、おお、ここにつながったか、ぴったりだと思つたんだ。流

れ流れているんな景色を見てきたであろう流木が、今の姿になるまでの長い時間と経験、表情や味わいをそのまま大事に活かせるつて。」

急に興奮気味に話し出した村崎さんに、僕は戸惑った。

村崎さんはいつも黙々と作業しているから、心も常に冷静沈着なんだと思つていた。でも違った。彼はほんとうに額縁を作ることが好きで、こんなに熱い気持ちでひとつひとつに取り組んでいたのだ。

まるで用意されたかのように、村崎さんの手にたどりついた流木。

⁽³⁾ そうか、そういうことだったのか。

「村崎さん、こんなときのために、流木を拾ったりしてるんですね。」

納得しながら僕が言うのと村崎さんは、いや、と首を振る。

「今回はたまたまだ。売り物になるかどうかは関係なく、俺はただ手作りの額つてものを残したいだけだよ。形にして見せないと、知ることできない。」

見せる？ 知るつて、誰が？

僕がきよんとしていると、村崎さんは顎に手をやりながら言った。

「俺は、ちよつと危機を感じてるね。日本美術が危ないつて。それは素材から言えることで、たとえば江戸時代以前の書物はまだきれいに残ってるだろ。でも、ここ百年で作られた紙は粉化ふんかしちゃつてそんなにもたないんだ。せつかくの文献も絵もこなごなだよ。昔の日本には優れた技術がたくさんあつたのに、口伝でしか継承されないから消えてしまったものがいくつもある。オートメーション化が進んで、後継者をじっくり育てる余地もない。産業革命のあとに育つたのは、弟子じゃなくてビルばかりだ。」

⁽⁴⁾ 堰せきを切つてあふれ出す村崎さんの話に、僕は黙って耳を傾ける。彼は

遠くを見やるようにして、語り続けた。

「額装は高名な画家や美術館だけのものじゃない。ごく普通の一般家庭で、もっと日常的に楽しめるはずなんだ。子どもの描いた絵でも好きな人からもらったポストカードでも、気持ちいいなと素直に思えるものがいつもそばにあるって、すごく豊かなことだよ。額の良さを、その技術を、できるだけたくさんの人に見せて伝えていきたいって思うんだ。世間一般にとって、もっと身近な存在になるように知らせていきたいんだ。それが、俺の夢だね。人の営みと共に絵があり続ける、真の豊かな生活。」

本当に、村崎さんが一度にこんなにしゃべるのを見るのは初めてだった。普段は寡黙な彼の中にこれだけたくさん⁽⁵⁾の想いがつまっていることを、僕はどうして理解しようとしなかったのだろう。

「夢が見られなきゃ、だめだ。」って、そのひとことにすべてが凝縮されていたのに。

やっとわかった。

村崎さんの夢は……。額や絵に対してだけじゃない、毎日の暮らしに向けられているんだ。生身の肉体と心を持った、人々の。

村崎さんは僕にちらりと目をやった。

「⁽⁵⁾なんの木を使うか決めたのか？」
僕はうなずく。

「桜を。」

(青山美智子「赤と青とエスキース」による)

〔注〕 ジャック——『エスキース』を描いた画家。「僕」はジャック

に会ったことがある。

デコラティブ——装飾が多いさま。

額竿^{がきざお}——額縁の材料。

モールディング——凹凸のある装飾を施した、額縁の材料。

円城寺さん——円城寺画廊の経営者。

〔問1〕⁽¹⁾僕は方眼紙に鉛筆を走らせる。とあるが、この表現から読み

取れる「僕」の様子として最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 額縁の形状を既に決めていたが、もっと自由にデザインをした方がよいと思い、急いで描き直している様子。

イ 額縁のデザインに悩んでいたが、絵のブローチから瞬間的に浮かんだイメージを形にしようと、一気に描き始めた様子。

ウ デッサンをすることだけに集中していたが、絵に対する理解を深めることも大切だと分かり、丁寧に描き直している様子。

エ 時間のたつのを忘れて絵のブローチに見入っていたが、デッサンを中断していたことに気が付き、慌てて描き始めた様子。

〔問2〕⁽²⁾ 僕は目を閉じてため息をつく。とあるが、「僕」が「目を閉じてため息をつ」いたわけとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 豊富な額竿の中から自分のデザインに近いものを探せると期待していたが、どの額竿も絵と完全には調和しないことに悩んだから。

イ 額縁を簡単に作れると思っていたが、難しい技術が必要だということが分かり完成させることができなかったから。

ウ 自分の想いが外に表れない額縁を作るためにあえて質素な額竿を選ぼうとしたが、希望どおりのものが見付からず動揺したから。

エ 工房の全ての額竿を絵にあててじっくりと額縁のデザインを考えながら、決まらないまま時間が過ぎていたのであせりを感じたから。

〔問3〕⁽³⁾ そうか、そういうことだったのか。とあるが、このときの「僕」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 村崎がよい流木の見極め方を冷静に話しているのを聞き、村崎と一緒に流木を拾ってみたいと期待している。

イ 村崎が古い絵画の知識を豊富にもっていたことを知り、これまで話してくれなかったことを残念に感じている。

ウ 村崎が高価な流木を使って額縁を作っていたことを知り、興味をもつとともに作り方を教えてほしいと願っている。

エ 村崎が流木を拾っていたのはいつ出会うか分からない絵のためであったことを知り、驚きながらも納得している。

〔問4〕⁽⁴⁾ 堰を切つてあふれ出す村崎さんの話に、僕は黙って耳を傾ける。とあるが、この表現について述べたものとして最も適切なのは、次のうちではどれか。

ア 村崎の額縁作りに対する考えを我慢強く聞いている「僕」の様子を、語句の並び替えを用いて鮮やかに表現している。

イ 村崎の額縁作りに対する考えを聞き流せずにいる「僕」の様子を、語句の繰り返しを用いて巧みに表現している。

ウ 村崎の額縁作りに対する考えを真剣に聞いている「僕」の様子を、慣用語を用いて印象的に表現している。

エ 村崎の額縁作りに対する考えを冷静に聞いている「僕」の様子を、擬態語を用いて躍動的に表現している。

〔問5〕⁽⁵⁾ 僕はうなずく。とあるが、このときの「僕」の気持ちに最も近いのは、次のうちではどれか。

ア 加工していない木材から額縁作りをしてきたことを反省し、これからは効率よく多くの額縁を作っていこうと思う気持ち。

イ 装飾を施していない木材から額縁を作る選択は間違っていないと確信し、自分が思い描く額縁を作り上げようと思う気持ち。

ウ 今後は美術館に展示される作品を額装していききたいので、村崎に教えてもらいながら技術を高めようと思う気持ち。

エ 予算をかければ理想的な額縁を作ることができると思ったので、質の高い木材を使おうと思う気持ち。

次の文章を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

家具は日常的にすべての生活に使われている。そしてまたその必要によってつくられている。こういう面からいえば、「家具は芸術である」ということばはおかしく聞こえるかもしれないが、家具を最も身近な芸術として考えることが、家具を理解する一番よい道であろう。（第一段）

人間生活が始まって以来、たくさん家具がつくられてきた。これはそれぞれの時代の生活や獲得した技術、それに使う材料などで合成されたものであるが、古い家具には現在でも十分な価値を持っているものと、使い捨てられてきたものがある。前者は人間の伝統をそのまま物語るものであると同時に、現在でもただながめるだけでなく、生活に使えるものも数多い。またそれをながめるだけでも意味がある。これは家具が芸術であることをよく物語っている。（第二段）

だが現在の生活において、人間は過去の家具だけで満足しているわけではない。新しい材料や技術によってまったく違ったものがつくられてきた。これはまた同時に、それを使う人間の生活の新たな展開ともいえる。⁽¹⁾新しい家具をつくり、それを使うということは、人間の創造行為の中で最も基礎的なものといつてよいだろう。（第三段）

新しい家具が生活に参加すると、そこには新しい生活が生まれる。そしてこれはいつまでも終わることのないプロセスである。この意味で、ある一つの家具が理想的であると考えることは、一般には間違いであり、人間自体の持つ多様性、そしてまたそれぞれの人間の生活の変化ということの中に、これからも新たな家具が生まれるだろう。そしてこのような家具を単に使用するものではなく、芸術としてとらえることが、未来

の家具を考える上にも最も基本的なことといつてよい。（第四段）

住まいには「完成」という時点がないということは一般の建築と住まいを分ける一つのポイントだろう。一般の建築にしても、ミラノのドームはつくり始めて五百年になるが、いまだに未完成のものを残しており、広い意味では、すべての建築が完成することはないといつてもよいかもしれない。だがそれを最も本質的に持っているのが住まいである。そしてさらにその基本は、人間が完成することがないのと同様である。（第五段）

こういう意味で考えれば、住まいの定型は存在しない。^{*}ベルサイユ宮殿も、原始人の洞窟も、住まいという点では同一であるが、これと同じに考えることは普通の意味ではできないだろう。したがって、理想的に考えれば住まいはこんなものでなければならぬということを理論的に定めることは不可能である。だが、それならなぜ多くの国が住宅法といった形で、住まいの面積や内容について法律的に規定をしているのであるうか。（第六段）

これは人間が基本的には一人一人が自由であるというのに対して、社会的機構が、教育などを含めて、あるシステムをつくることによって人間生活を支えているのと似ている。ベルサイユと洞窟との距離は遠いが、人間はある意味でその間のどの位置をも占めることができる。だが住まいについての法律的規定が必要なのは、社会的立場での人間では、何らかの形の住まいの概念、約束が必要になってくるからであろう。（第七段）

したがって、住まいの最も基本的な条件は、面積やその内部の部屋の構成や設備等、人間が住まうためにだれにとつても必要な部分にあるのではなく、一人一人が自分で発見する何らかのものにある。⁽²⁾だれにとつても必要なものは、ある意味で社会化されてもまったくさしつかえない

ものである。(第八段)

自分にだけ必要なものの発見、これは別のことばで置きかえれば、芸術の世界であるといえる。音にしろ、造形にしろ、芸術分野のすべては最終的には個人の問題であり、ペーローペンとモーツァルトを、どちらがすぐれているかということ客観的に判断することは不可能である。

住まいも、究極的には二つのものどちらがすぐれているかという判断は、まったく個人個人の問題である。(第九段)

一般に住まいには実用性があると考えられているが、実用性とまったく個人的な芸術性との間の区別は非常に困難である。また、住まいの理想がまったく個人個人のものであるにせよ、それが得られるプロセスが社会的に制約されており、すべての人が自由に住まいを得られない以上、当然人間が住まうという部分に含まれている実用性を無視してはならないことはいうまでもない。(第十段)

だが逆に、実用性から住まいの良否を最終的に判断することもまた間違っている。住まいには、そのどこかに一人一人が発見するポイントがなければならぬ。これは人間が住まうという広い意味で考えれば、必ずしも自分の家という範囲にとどまることはなく、社会的な空間の中であつてもかまわないだろう。だが、それにしても自分の住まいということが問題にされるのは、そこは単に発見するだけではなく、自分自身の意思によって動かすことができる自由の場であるという点であろう。この意味で、すべての人にとって、住まう必要はあつても、住まいの必要は必ずしもない。(第十一段)

すべての芸術は本来、自分自身が発見し創造していくものであるから、住まいも一人一人がみずから考え、つくり出すものであることが理想で

あろう。だが音楽や造形の場合にも、その誕生がすぐれた芸術家に対する期待となつてあらわれるように、住まいをつくり出す仕事は建築家に期待されることは、理想ではないまでも、事実であろう。(第十二段)

だがここに、つくる人と住まう人との分離形態が生まれ、大きな危険性をはらむことになる。これは他の造形や音の世界でも同様である。完成されたものを求めるといふ感情がここに生まれる。つくる人間とそれを評価する人間の二つに分かれていく。だがこの分離は、現実の世界では避けられないことだが、芸術の商品化への最も安易な道であろう。(第十三段)

この意味から考えて、住まいは基本的に常に「未完成」でなければならず、また完成されたと見えるものの中に未完成さを発見することが基本である。⁽³⁾それは住まいが単なるハードウェアではなく、ハードウェアとしての建築と人間との間に存在するソフトウェアであり、同じようにつくられた壁一つにしても、それに向かう人間のそのときそのときの感情によつて、ソフトウェアが変化していくといった問題とも関連する。そしてその意味からも、住まいはハードウェアとしてはできるだけ無限定なものであるのが望ましく、それによつて新たなソフトウェアは、常に人間とのつながりで考えられるだろう。この意味で、住まいは、もしも他人から見ても完成されたものであるように見えても、自分からは常に未完成でなければならないと思う。(第十四段)

(池邊陽「デザインの鍵」による)

[注] ミラノのドーム——イタリアのミラノにある大聖堂。

ベルサイユ宮殿——フランスの宮殿。

〔問1〕新しい家具をつくり、それを使うということは、人間の創造⁽¹⁾

行為の中で最も基礎的なものといつてよいだろう。とあるが、

このように筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 新しい家具は、ある一つの家具を理想として生み出され、同時に新しい価値をつくっていると考えたから。

イ 新しい家具は、伝統的な材料や技術を守る目的で生み出され、同時に新しい材料をつくっていると考えたから。

ウ 新しい家具は、人間自体の持つ多様性や生活の変化に応じて生み出され、同時に新しい生活をつくっていると考えたから。

エ 新しい家具は、使い捨てられることを前提に生み出され、同時に新しい時代の特色をつくっていると考えたから。

〔問2〕⁽²⁾ だれにとつても必要なものは、ある意味で社会化されてもまったくさしつかえないものである。とはどういうことか。

次のうちから最も適切なものを選び。

ア 住まいの最も基本的な条件は一人一人が発見するものにあるので、住まいの面積等が法律で規定されてもさしつかえないということ。

イ 住まいの概念や約束は一人一人が決められるので、住まいの定型が社会のシステムに組み込まれてもさしつかえないということ。

ウ 住まいを得る方法は社会的に自由なので、一人一人の住まいの最も基本的な条件が法律で規定されてもさしつかえないということ。

エ 住まいの本質的な役割は社会的立場で変化するので、一人一人が住まいに求めるものが同一化されてもさしつかえないということ。

〔問3〕この文章の構成における第十段の役割を説明したものとして

最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 第九段で述べた内容に対して、第十段では具体的な事例を挙げて、解決策を示している。

イ 第九段で述べた内容を受けて、第十段では別の視点を付け加えて、論の展開を図っている。

ウ 第九段で述べた内容を受けて、第十段では結論を導くための手順を、詳しく説明している。

エ 第九段で述べた内容に対して、第十段では反対の事例を示して、これまでの論を否定している。

〔問4〕⁽³⁾ それは住まいが単なるハードウェアではなく、ハードウェアとしての建築と人間との間に存在するソフトウェアであり、同じようにつくられた壁一つにしても、それに向かう人間のその

ときそのときの感情によつて、ソフトウェアが変化していくといった問題とも関連する。とあるが、このように筆者が述べたのはなぜか。次のうちから最も適切なものを選び。

ア 住まいは建築としては完成しているが、住まう人にとつて実用的かどうかで評価されるという点で未完成でもあると考えたから。

イ 住まいは建築としては完成しているが、住まう人が建築家への期待を常にもつているという点で未完成でもあると考えたから。

ウ 住まいは建築としては完成しているが、住まう人と評価する人を区別するという点で未完成でもあると考えたから。

エ 住まいは建築としては完成しているが、住まう人によつて創造され変化するという点で未完成でもあると考えたから。

〔問5〕 国語の授業でこの文章を読んだ後、筆者の考えを参考にして、「完成されたと見えるものの中に『未完成』を発見するということ」というテーマで自分の意見を発表することになった。このときにあなたが話す言葉を、具体的な体験や見聞も含めて二百字以内で書け。なお、書き出しや改行の際の空欄、や。や「なども、それぞれ字数に数えよ。

5

次のAは、平安時代の歌人、藤原定家が編んだ「百人一首」に関する座談会の記録であり、Bは、Aで述べられている和歌について書かれた文章である。また、Cは、Aで取り上げられた和歌の原文とその現代語訳である。これらの文章や和歌を読んで、あとの各問に答えよ。（*印の付いている言葉には、本文のあとに〔注〕がある。）

A 島内 倭さんは、『伊勢物語』の歌、『源氏物語』の歌を読んだと

きと、定家の百人一首で王朝の和歌を読んだときと、手触りが違うとか同じとか感じられましたか。

俵 伊勢や源氏は最初から場面がありますもんね。

馬場 長い詞書のような、『伊勢物語』は全部詞書だから、それで押されて出てきた歌。

島内 百人一首は歌だけポイント出るので、後から歌の状況を勉強することになる。

俵 今回の馬場さんのご本（『馬場あき子の「百人一首」』）ではその

場面を提示してもらった。私はなぜ時代を超えて読み継がれてきたかで、百のパッケージのことを言いましたけど、もう一つ、御指摘のように恋の歌が多いということは、やっぱり多くの人の心を捉えたことの要因だと思っんですね。思い、心の動きを捉えたということが時代を超えて読まれた要因だし、私が常々思うことは、恋の題詠って、題を与えられてありもしないことを詠むんじゃないかと、題だからという事で大手を振って本当の思いを吐露できる装置なんじゃないかと。

馬場 そうです。

俵 今のお話だとそれを広げて、本当は卑しい名誉欲とか、何かいいものがこつち来ないかというのを待ち焦がれている気持も、恋だからということでは言えちゃいますよね。

馬場 言えちゃうのよね。

俵 (1) だからそういう装置としても働いているという今の説、凄く面白いと思いました。定家は別に百人全員の代表作を選んだわけではないですね。

馬場 色紙で屏風に貼るのにちようにいいということね。

俵 (2) それはすごく感じますね。絵画的に見栄えのする歌は有利に扱われているかなと。

馬場 映像が見える歌がかなりあるし。

島内 日本文化の本質は恋と自然にあります。自然に関しては春夏秋冬。

馬場 風景がある歌がありますよね。初めから見ていつても、「春過ぎて」の歌も自然が見えるし、「田子の浦」（山辺赤人）も自然が見えてくるし。

島内 日本全国の地名も歌枕として散らばっていますし。

馬場 序詞(3)なんかほとんど自然を力にして下の句を読んでいるわけですから。(あしびきの山鳥の尾のしだり尾の…) (柿本人麿)とい

うのも長い尻尾の鶏みたいな鳥ね、昔の人は知っていたんでしょね。知っていたとすれば面白いんだけど、見たことある人少ないと思うんですね。だけどこの序詞によって見ることも出来ますしね。序詞の(みかの原わきて流るるいづみ川…) (中納言兼輔)、これもね、見えていたのかしらと思うんです。いづみ川という観念を持っていたから見えたんでしょね。

俵 頭の中で見えていた。

島内 『馬場あき子の「百人一首」』に書かれている「みかの原」の馬場さんの「歌の心」がとても良くてですね、「瓶原をふた分けして清冽せいれつに流れゆくいづみ川よ、瓶の名ゆえに、まるで不思議な瓶から流れ出る水のイメージ…」これ現代詩ですよ。これは、創造的な解釈です。〈村雨の露もまだ干ぬまきの葉に霧立ちのぼる秋の夕暮れ〉(寂蓮法師)は、馬場さんの「歌の心」で、「ほのかに秋の香がする夕べだ」と書いてあって、あっと思っただけです。

(馬場あき子、俵万智、島内景二)

「百人一首のおもしろさ」による)

B

瓶みかの原はらわきて流るる泉川いづみがはいつ見きとてか恋こひしかるらむ

(九九六 藤原兼輔)

瓶の原を分けて、湧いては流れ出る泉川。その「いづみ」という名のように、いつ見たからといって、私はあの人のことが、こんなにも恋

しいのだろう。

(4) まだ親しく逢ったことがない人への、恋の思いを詠んだ歌である。『百人一首』にも選ばれている。

作者の藤原兼輔は、紫式部の曾祖父で、『古今和歌集』の時代に活躍した歌人である。この歌の作者は、実は兼輔ではないらしいが、彼の作として伝えられてきたために、『新古今和歌集』や『百人一首』には、兼輔の歌として選ばれたのである。

初句の「瓶の原」は、山城国(現在の京都府)の歌枕である。第二句の「わきて」は、「分きて」と「湧きて」の掛詞で、「湧きて」が、第三句の「泉川」の「泉」と縁語になる。その「泉川」は、山城国の歌枕で、今の木津川のことである。

以上の上句は、「泉川」の「泉」と、第四句の「いつみ」が同じ音(清濁は関係しない)であることから、「いつ見」を導き出す序詞になっている。この上句の序詞には意味がなく、下句の「いつ見きとてか恋しかるらむ」が、この歌の言いたいことである。ちゃんと逢ったこともない間柄なのに、どうしてこんなに恋してしまうのかと、恋の思いに深くとらわれた自分を、いぶかしんでいるのである。

しかし、上句の序詞がもたらす印象は、いかにもさわやかである。湧き出る泉の清らかなイメージと、明るく軽やかなリズム感。それが、「いつみ」の音の繰り返しによって、鮮やかに下句へとつながってゆく。一首全体の音の連なりが、初々しい恋心の弾みをかたどっているのである。こうした快い音楽性にこそ、この歌の一番の魅力があるといえよう。

(小林大輔編「新古今和歌集」による)

春過ぎて夏来にけらし白妙の衣干すてふ天の香具山

持統天皇

春が過ぎて夏が来たらしい。夏になると衣を干すという天の香具山に、真っ白い衣が干してあるよ。

田子の浦にうち出でてみれば白妙の富士の高嶺に雪は降りつつ

山辺赤人

田子の浦に出て、仰ぎ見ると、真っ白な富士の高嶺に雪がしきりに降っているよ。

あしびきの山鳥の尾のしだり尾のながながし夜をひとりかも寝む

柿本人麿

山鳥の長く垂れ下がった尾のように、私は長い長い夜を二人ぼっちで寝るのであるうか。

村雨の露もまだ干ぬまきの葉に霧立ちのぼる秋の夕暮れ

寂蓮法師

通り過ぎていった村雨がまだ乾ききっていない、真木の葉のあたりには、ゆっくりと霧が立ち昇ってゆく、秋の夕暮れよ。

(谷知子編「百人一首(全)」による)

〔注〕 詞書——和歌の前に付され、和歌を補足する文。

百のパッケージ——百首をひとまとまりとして表した表現。

題詠——題を決めておいて詩歌などをつくること。

色紙——和歌などを書く長方形の紙。

歌枕——和歌に詠み込まれる各地の名所。

清冽——水が清らかで冷たいこと。

〔問1〕⁽¹⁾ だからそういう装置としても働いているという今の説、凄く面白と思いましたが、とあるが、「そういう装置としても働いている」とはどういうことか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 恋という題で歌を詠むと、本当の思いを堂々と表現することができるということ。

イ 恋という題で歌を詠むと、ありもしない思いを控えめに表現することができるということ。

ウ 恋という題で歌を詠むと、待ち焦がれる思いを百首で表現できるということ。

エ 恋という題で歌を詠むと、歌の状況を後から勉強することができるということ。

〔問2〕⁽²⁾ 俵さんの発言のこの座談会における役割を説明したものと

最も適切なものは、次のうちではどれか。

ア 馬場さんの発言を受け、馬場さんの意見とは異なる考えを示し賛同を求めることで、本来の話題に戻そうとしている。

イ 馬場さんの発言を受け、馬場さんとは反対の立場から自分の感想を述べることで、話題の転換を図っている。

ウ 馬場さんの発言を受け、馬場さんにこれまでの問題点を示し質問をすることで、問題の解決を図っている。

エ 馬場さんの発言を受け、馬場さんの意見に同意を示し自分の考えを述べることで、その後の話題を広げている。

〔問3〕⁽³⁾ Aでは序詞じょことばなんかほとんど自然を力にして下の句を読んでいる

わけですから。とあるが、「みかの原わきて流るるいづみ川」の和歌の序詞の働きについて、Bではどのように説明しているか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 「わきて」に濁音がないことから、「泉川」がどこまでも流れていくイメージを作り上げている。

イ 「瓶の原」という縁語を多用することで、秋の川に霧が立ち込めるイメージを作り上げている。

ウ 「泉」に関連する縁語や掛詞を用いて、泉の湧き出る清らかなイメージを作り上げている。

エ 「泉川」の歌枕である「木津川」を用いて、遠くまで山が連なるイメージを作り上げている。

〔問4〕⁽⁴⁾ まだ親しく逢あったことがない人への、恋の思いを詠んだ歌である。

とあるが、「逢ったことがない」の「ない」と同じ意味・用法のものを、次の各文の――を付けた「ない」のうちから選べ。

ア 彼の研究の獨創性は他に類を見ない。

イ いつまでも拍手が鳴りやまない。

ウ 優勝の興奮がまだ冷めない。

エ 今日の空には雲が一つもない。

〔問5〕⁽⁵⁾ 干ぬとあるが、Cの現代語訳において「干ぬ」に相当する部分はどこか。次のうちから最も適切なものを選べ。

ア 通り過ぎていった村雨

イ 乾ききっていない

ウ 立ち昇ってゆく

エ 秋の夕暮れ